

## 情報通信研究機構初代理事長の3年間

情報通信研究機構 初代理事長

長 尾 真



情報通信研究機構 (NICT) は、歴史と伝統を持つ通信総合研究所と通信・放送機構を統合した独立行政法人として平成16年4月に発足した。私の使命はこの2つの組織を融合し一貫した考え方で運営し、情報通信技術の唯一の公的研究機関として成果を上げ、日本の情報通信分野を技術的に支え、これからグローバル化してゆく社会の基盤として貢献してゆくことであった。就任したときに幾つかの目標を掲げた。それらは(1)産学官の連携を強化して高度情報通信社会のための基盤技術を作ってゆくこと、(2)NICTの持つ実力を世界に示し、世界をリードしてゆくこと、(3)国の情報通信政策とよく協調し、また国に対して積極的に提言してゆくこと、(4)大学の研究と産業界の開発・商品化の間に立って問題解決をしてゆく立場を自覚すること、(5)これからの社会が何を必要としているかをよく考え、適切な研究開発をすること、などであった。

ここから導き出されるNICTの主要な研究開発として、(i)ヒューマンコミュニケーションを円滑にするキーテクノロジーの創出、(ii)情報セキュリティや電磁環境、地球環境計測などの立場から社会の安心、安全を確保するための研究開発、(iii)光や量子通信など、新しい通信技術の基礎研究という3つを特に重点課題とした。

私の在任中に出された主な成果は、(a)光パケット交換ノード構成基礎技術、(b)サイバー攻撃に対する分析手法の開発、(c)防災アドホック無線通信システム、(d)日英中間の機械翻訳技術の進展、(e)周波数標準の高精度化とインターネット時刻サーバの開発、およびタイムビジネスへの提供、(f)新世代ネットワーク技術の開発、(g)脳、バイオICTの進展、(h)高精度電磁波センシング技術などのほかにいろいろとあるが、これらについては本誌に詳しく紹介されている。

NICTの固有の研究開発活動のほかに、社会に実際に繋がってゆく開発、製品化技術については委託研究、あるいは情報通信ベンチャー支援などの観点から多くの企業の開発を支援してきた。その中にはこれからの高度情報通信・放送技術とその融合に関するものもあり、多くの成果を上げた。

国際的にはフランス、インド、タイ、マレーシア、シンガポール、中国、その他の国の主要な情報通信研究機関と研究協力の覚書を結んだり交流したりし、NICTの国際化への努力をした。

平成17年6月には天皇・皇后両陛下に鹿島宇宙通信研究センターをご視察いただく栄に浴した。また同年5月には小泉純一郎内閣総理大臣(当時)の横須賀無線通信研究センターご視察もあり、思い出が深い。

平成19年3月になって突然国会から国立国会図書館長に指名され、NICTを退任することになり、多くの方々にご迷惑をお掛けした。やり残したことはいろいろあったが、その後のNICTの発展を心強く見守っている。在任中に頂いたNICTの研究者、職員の皆様、また特に総務省の関係の皆様のご協力、ご厚意には感謝の念に堪えない思いでいる。

## 10周年によせて



情報通信研究機構 第二代理事長

宮原 秀夫

総務省通信総合研究所 (CRL) から独立行政法人情報通信研究機構 (NICT) となって以来、10周年を迎えた。その間のおよそ半分に当たる5年半の期間を、理事長として勤めることができたことは、これまでの人生において、最も誇りに思い、また充実したものの一つである。皆さんと共に、10周年を迎える喜びを分かち合いたいと思う。この間に、構成員の皆さんと共にやってきた研究活動を含む諸々の出来事等については、他で紹介されることと思うので、ここでは、それには触れず、私自身がどのような思いで、NICT に着任し、どのような思いで運営に当たり、自己反省も含めて退職時に感じたことなどを率直に述べてみようと思う。

情報通信研究分野、中でも特にネットワーク分野は、まさに30年あまりにわたる私の研究分野そのものであり、したがって、大学在職中も絶えず NICT の研究活動を横目で、いわば競争相手として見続けていた。そういう状況から一転して、今度は、NICT の理事長、何となくしっくりこなかった。その時の支えとなったのは、国立大学から国立大学法人への移行期に、勤めさせてもらった総長職、そしてその間の経験、それらを通して得た大学経営に関するノウハウの蓄積であった。それらをひっさげて、いざ敵陣へ乗り込んだ感じであった。その時の高揚した自分自身の様子は、平成19年9月の就任挨拶にも現れており、読み返すと思わず苦笑してしまう。それにも拘らず、じっと私の挨拶を聞いて頂いていた構成員の方々に、お詫びとお礼を申し上げたいというのが、今の正直な気持ちである。

その後は、毎年の始めに、年頭所感なるものを述べる機会が与えられた。与えられたというよりマストであった。これには、私自身結構な時間をとり、できるだけ私の思いが伝わるように努めたつもりである。思い起こすに、その間一貫して私が思っていたことは、NICT の構成員が、いかにインセンティブを持って、やりがいを感じて、研究に従事してもらえるか、またそのためのロジスティクスは、いかにあるべきなのかということであった。そして、それを実現するために理事長として、どのようにガバナンスを発揮すれば良いのかという一点であった。しかし、そういった気概を一気にそぐ事態が起こった。おそらく皆さんの記憶にも強く残っていると思われる、「仕分け」という言葉で代表される NICT に対する一連の評価であった。あの「仕分け」に対しては、諸々の意見はあるが、私は、今でも納得のいくものではなかったと思っている。

前理事長の残任期間を含めて、5年半の任期を終え、その後は、外から NICT を見る立場に変わったが、在職中にも増して、TV、新聞紙面での NICT のニュースに目がいき、一喜一憂している。10周年という大きな節目を経て、NICT が、ますます発展し、多くの人から、更なる高い評価を得る研究機構へと発展することを、心から祈念して止まない。